

平成29年度事業報告書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

I 一般概況

1. 国内の漁獲並びに魚油・魚粉の生産状況

(一社) 漁業情報サービスセンターが発表した2017年の主要港(調査対象漁港:48漁港)水揚量によると、マイワシは37万9千トンで前年比143%と増加した。その一方でサバ類は46万2千トンで前年比95%、カタクチイワシは2万4千トンで前年比94%とともに減少し、サンマの水揚量は6万6千トンで前年比66%と大幅に減少した。

当協会では、昨年と同様に(公社)日本フィッシュ・ミール協会に魚油・魚粉の生産実績の調査を委託した。

その結果、調査対象となったフィッシュ・ミール工場は59社で、この内58工場が稼動していた。生産された魚油は7万8千トン、このうち、燃料用に5千トンが消費され、販売用に7万1千トンが向けられた。魚粉生産量は18万1千トンであった。また、処理された原料はラウンドが15万6千トン、都市残滓・水産加工残滓が68万1千トン、合計83万7千トンであった。

2. 輸入実績及び価格の推移

財務省貿易統計によると、2017年の魚油の輸入量は1万9千トンで前年実績の92%に減少した。チリからの輸入量が9千3百トンで、続いて米国からが2千8百トンであった。デンマークからは2千トン、南アフリカから1千3百トンの魚油が輸入された。これら4カ国からの輸入量が全体の82%を占めた。その一方で、魚油の主要生産国であるペルーからの輸入は8百トンにとどまった。

魚油の海外相場(CIF ヨーロッパ US\$/トン)は、オイルワールド誌によると1月に\$1,569で始まり、その後は値下がりが続き、6月に\$1,200まで下がった。その後は値上げ傾向が続き12月に\$1,938で終了した。

魚粉の輸入量は17万4千トンで前年比113%であった。ペルーからの輸入が4万2千トン、これに次いでチリからが2万4千トン、エクアドルからが1万4千トン、米国が1万2千トンでこの4カ国で全体の53%を占めた。地域別では、南米とともに東南アジア諸国からの輸入が大きな割合を占めている。

魚粉の海外相場(FCA ブレーメン 64/65% US\$/トン)は、オイルワールド誌によると1月に\$1,386で始まり、その後は徐々に値下がりし4月には\$1,296になった。その後は値上がりし9月には\$1,402となり一旦は下がったが、12月には\$1,480で終了した。

2017年のドルに対する円の平均為替相場は1月に116円48銭で始まり、上がり下がりを経りながら円高傾向を維持し9月には109円48銭まで上がった。その後は円安傾向に転じ、12月には112円48銭で終了した。

財務省貿易統計によると、トン当たりの平均輸入価格は、魚油ではチリ産が13万9千円、米国産が26万4千円であり、デンマーク産が15万6千円、南アフリカ産が17万4千円であった。輸入魚油全体の平均価格は21万1千円で前年比109%であった。また、魚粉ではペルー産が16万5千円、チリ産が19万1千円、エクアドル産が12万9千円、米国産が15万9千円であり、輸入魚粉全体の平均価格は15万2千円で前年比99.5%であった。

2016年および2017年の魚油・魚粉生産実績

		2016年	2017年	前年比
1. 原料処理量				
ラウンド		96,659トン	156,111トン	161.5%
残滓		719,768トン	680,931トン	94.6%
合計		816,427トン	837,042トン	102.5%
2. 生産量				
		歩留		
魚油		62,344トン	77,960トン (9.3%)	125.0%
魚粉		177,236トン	181,469トン (21.7%)	102.4%
3. 魚油用途明細				
		比率		
燃料用		4,723トン	5,121トン (6.7%)	108.4%
販売用		57,376トン	71,205トン (93.3%)	124.1%
合計		62,099トン	76,326トン (100.0%)	122.9%

注) (公社)日本フィッシュ・ミール協会調査による。稼働工場数：2016年60社，2017年58社。
魚油用途明細合計と魚油生産量が異なるのは，在庫が繰り越されたことによる。

魚油の需給状況

		(1,000トン)					
		2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
魚油・肝油		59.1	60.0	62.5	60.6	62.3	78.0
合計		59.1	60.0	62.5	60.6	62.3	78.0

注) (公社)日本フィッシュ・ミール協会調査による。

		(1,000トン)					
		2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
魚油		44.4	17.6	17.5	21.4	20.2	18.6
魚肝油		0.8	0.9	1.0	1.3	2.2	1.4
合計		45.2	18.5	18.5	22.7	22.4	20.0

注) 財務省貿易統計による。

		(1,000トン)					
		2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
魚油		0.7	1.5	5.1	3.5	3.4	5.3
魚肝油		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		0.8	1.5	5.2	3.5	3.4	5.3

注) 財務省貿易統計による。

		(1,000トン)					
		2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
国内消費食用加工油脂向		8.0	8.0	7.0	7.0	7.0	7.0
その他		81.0	69.7	71.5	73.7	70.7	71.5
合計		89.0	77.7	78.5	80.7	77.7	78.5

注) 日本水産油脂協会による推算。その他には，水産養殖用魚油およびミール工場における自家燃料消費が含まれる。

II 事業の概要

2017年の道東沖でのマイワシの漁獲は12万トンに達し、その多くは魚粉・魚油の製造に使用されており、ホールミールの貴重な原料である。2000年代初めの不漁期には全国の漁獲量でも5万トン前後だったのでマイワシ資源は回復に向かっている。今後資源量がさらに大きくなる可能性は十分あるが、釧路地区のミール工場数は豊漁期の1980年代の24から現在は2と激減しており、処理能力も約1/10になっている。昨年はミール工場の処理状況に合わせて漁船は休漁しながら漁獲を行っており、漁獲能力に対してミール工場の処理が追いつかないのが実態であった。このままでは、資源が増加しても有効利用につながらない事態が現実味を帯びて来ている。

当協会では魚油及び魚粉の生産状況を迅速に把握するため、(公社)日本フィッシュ・ミール協会の協力を得て、各魚粉工場から提供される生産データをまとめる方式で平成29年も調査を行った(調査は平成7年より継続している)。この他、魚油等油脂に関連するデータとして、国内・国外における漁獲量、各国の魚油・魚粉の生産量、輸出入量及び価格、植物油等の消費量、養殖魚及び養魚飼料の生産量等の収集を行った。また、国内で生産される魚油、魚粉並びに主要港で水揚げされたカタクチイワシ、マイワシ、マサバの栄養成分を中心とした化学分析を(一財)日本食品分析センターに依頼し調査を行った。これらの調査データについては取りまとめを行い『2017年 水産油脂統計年鑑』として平成30年5月に刊行を予定している。

講演会は「水産油脂資源講演会」と「水産油脂技術懇話会」を開催し、これらは『水産油脂資源講演会記録』と『水産油脂技術懇話会記録』として刊行した。またDHA・EPA協議会と共催で「公開講演会」を開催した。定期刊行物としては『2016年 水産油脂統計年鑑』と最近の話題などをテーマに取り上げた『JMOAレポート』を刊行した。ホームページに『小型浮魚の脂肪酸組成データ集』、『世界漁業・養殖業白書 2016年 魚粉と魚油の抜粋和訳』及び『魚油規格・CODEX STAN 329-2017 和訳』を掲載した。

1. 国内外の水産油脂及び関連する物資の資源・生産・流通・消費等についての調査

- ① (公社)日本フィッシュ・ミール協会に平成29年における国内の原料処理量、魚油・魚粉の生産量・用途について調査を依頼した。
- ② 国内外の資料を収集し魚油・魚粉の生産量、輸出入量、価格並びに消費等のデータを取りまとめた。

2. 水産油脂及び関連物資の機能・性状及び加工利用等に関する調査研究

- ① 銚子港(千葉県)に水揚げされたマイワシ、カタクチイワシ、マサバ並びに釧路港(北海道)に水揚げされたマイワシについて一般成分、脂肪酸組成等の脂質成分を分析した。
- ② 国産魚油の性状及び脂肪酸組成等について分析した。また、国産・輸入魚粉についても基礎成分をはじめアミノ酸組成等を分析した。

3. 水産油脂及び関連物資の調査研究並びに啓蒙普及等に係る広報出版

<講演会等の開催>

- ① 水産油脂の資源及び流通に関する講演会
平成29年8月25日(金)、「平成29年度水産油脂資源講演会」をアイビーホール青学会館にて開催した。

【演題及び講師】

「道東沖マイワシ資源増大にともなう釧路港における需給構造の変容
－「資源の持続的利用」の今日的課題－」

国立大学法人東京海洋大学 海洋生命科学部 海洋政策文化学科

准教授 工藤 貴史 氏

「マイワシ資源の動向と今後の見通し」

国立研究開発法人水産研究・教育機構 中央水産研究所

資源管理研究センター 資源評価グループ グループ長 渡邊 千夏子 氏

「北西太平洋公海域における外国漁船の漁獲と浮魚資源の変動について」

国立研究開発法人水産研究・教育機構

審議役 大関 芳沖 氏

【情報交換会】

資源講演会終了後に講師の先生にも出席していただき参加者との情報交換会を昨年度に引き続き実施した。

- ② 中堅・若手の研究者と当協会の賛助員並びに関係者による水産油脂技術懇話会
水産油脂技術懇話会を平成 29 年 6 月 20 日（火）及び 11 月 15 日（水）の 2 回、当協会新館
会議室にて開催した。

【演題及び講師】

「第 29 回水産油脂技術懇話会」

「イサダ（ツノナシオキアミ）からの新規肥満抑制物質 8-HEPE の同定と実用化に
向けた取り組み」

公益財団法人岩手生物工学研究センター 生物資源研究部

主任研究員 山田 秀俊 氏

「第 30 回水産油脂技術懇話会」

「ドコサヘキサエン酸による脳内エストロジオール合成の活性化とてんかん発作の軽減」

国立大学法人広島大学 大学院総合科学研究科 分子脳科学研究室

教授 山崎 岳 氏

- ③ DHA・EPA協議会と公開講演会の共催
平成 29 年 10 月 25 日（水）に『栄養素としての DHA・EPA の機能と分子構造からの考察』
と題して、アイビーホール青学会館にて開催した。

【演題及び講師】

「糖尿病妊婦における妊娠中の食事の重要性－n-3 系不飽和脂肪酸の役割－」

高崎健康福祉大学 健康福祉学部 健康栄養学科

講師 河原田 律子 氏

「医学情報の読み方（ほか）」

富山大学名誉教授・富山城南温泉第二病院

浜崎 智仁 氏

「DHA (C22:6n-3) の構造的意味と役割」

岐阜大学 工学部

岐阜大学フェロー・名誉教授 吉田 敏 氏

<出版>

- ① 『2016年 水産油脂統計年鑑』を5月に刊行した。
- ② 『第29回水産油脂技術懇話会記録 イサダ(ツノナシオキアミ)からの新規肥満抑制物質8-HEPEの同定と実用化に向けた取り組み』を9月に刊行した。
- ③ 『平成29年度水産油脂資源講演会記録』を11月に刊行した。
- ④ 『JMOAレポートNo.14 介護食品の物性規格・基準について』を11月に刊行した。
[筆者: 京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 講師 田代 有里 氏]
- ⑤ 『第30回水産油脂技術懇話会記録 ドコサヘキサエン酸による脳内エストロジオール合成の活性化とてんかん発作の軽減』を2月に刊行した。
- ⑥ 『JMOAレポートNo.15 下痢性貝毒検査体制の高度化がもたらしたホタテガイ養殖への影響』を2月に刊行した。
[筆者: (国研) 水産研究・教育機構 中央水産研究所 水産物応用開発研究センター
センター長 鈴木 敏之 氏]

<ホームページ>

- ① 『小型浮魚の脂肪酸組成データ集』(マイワシ49試料、マサバ66試料)を7月に掲載した。
- ② 『世界漁業・養殖業白書2016年 魚粉と魚油の抜粋和訳』を11月に掲載した。
- ③ 『魚油規格・CODEX STAN 329-2017 和訳』を1月に掲載した。

4. 土地・建物施設等の賃貸及びその維持・管理

<新館及び本館の建物の賃貸>

- ① 新館3階会議室の断熱工事を5月に実施した。
- ② 本館非常階段出口ドア7か所のうち未設置であった3か所を6月に自動施錠化した。
- ③ 本館雑排水槽及び排水貯留槽の清掃(3年に1回)を7月に実施した。

5. その他、本会の目的を達成するために必要な事業

<外部団体への協力>

- ① DHA・EPA協議会の事務局を当会館内に置き、同協議会の活動の支援、協力を行った。
- ② (公社)日本油化学会・規格試験法委員会へ基準油脂分析試験法の見直し等のため委員を派遣した。

6. 庶務事項その他

<会議>

- ① 理事会 3回
- ② 評議員会 1回

<その他>

- ① 内閣府に公益目的支出計画実施報告書を6月に提出した。
- ② 販売に供した山梨県北杜市大泉町の土地は最後の1区画(550㎡)を売却した。
- ③ 賛助員 20名

以 上